慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想学者としての小泉信三先生
Sub Title	Dr. Shinzo Koizumi as a scholar of social thought
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.11 (1966. 11) ,p.1240(70)- 1273(103)
JaLC DOI	10.14991/001.19661101-0070
Abstract	
Notes	小泉信三博士追悼特集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661101-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会思想学者としての小泉信三先生

平井　新

一

小泉先生が社会思想に初めて興味をもたれたのは、先生が慶応義塾の大学部を卒業された頃のことであって、その直接の契機となったのは、明治四十三年、幸徳伝次郎一派によって企てられたという大逆事件であった。これについて小泉先生は「私の履歴書」の中で「天皇（明治天皇）崩御の二年前に、幸徳伝次郎一派によって企てられたという大逆事件は強いショックでありました。幸徳は無政府主義を奉ずるものだと伝えられた。無政府主義とはいかなるものか、また虚無主義とはいかなるものか。無政府主義者がそれに訴えるという「実行宣伝」(propagande par le fait)、フランスに起った急進的組合運動者（サンジカリスト）が唱えるという直接行動とはいかなるものか。人びとはそれを問題にし、博学な森鷗外は「三田文学」に載せた「貧困」という小説形式の一文で、その解説と評価を試みたりした。人びとはしきりに「危険思想」ということを言った。危険思想が青年にとって魅力のない筈がない。当時、私たちの同僚や同年輩の友人に社会主義者と称すべきものは見当らなかったが、多かれ少なかれ社会主義に対して関心を寄せることは皆な一様であったといってよいでしょう。幸徳伝次郎、堺利彦の共訳による「共産党宣言」なども、私たちはすでに読んでいました[1]」と言っておられる。

大学在学中は特に堀江帰一、福田徳三、田中萃一郎、林毅陸等の教えをうけたが、わけても福田徳三の指導と感化とは深く、後年先生自らその学恩に感謝されていた。

当時、日本における社会思想研究の水準はまことに低いもので、「後年ある機会に堺が率直に私に告白した通り、幸徳、堺両人とも、久しくマルクスを知っていた訳ではなく、「宣言」の如きも翻訳するときに初めて読んだ位の次第であったということです。一方マルクシストに対する批判が、これがまた幼稚なもので、当時大学教授側でマルクスをよく読んでいるといわれたのは福田徳三博士が第一で、博士は「資本論」全三巻を読み、自らその索引を作ったと伝えられ、しばしばマルクスの深遠と難解については語ったが、これに対する批判としては系統的なものは何も発表してなかった。

当時すでにカント派法哲学者スタムレルのマルクス批判は、紹介されることはされていたが、よく理解されなかったと思う。ベームの価値論批判、ベルンシタインの修正主義、ヒルファディンクの資本論展開は何れもすでにヨーロッパで行われていたが、日本の学界はあまり問題にせず、概して呑気なものであった。」と当時の学界の一端を回顧していられる。

この程度の社会思想の知識で、イギリスに行ったと先生は述懐しておられる。そしてロンドンに着いて、この地の急進思想専門のヘンダースンという古本屋で共産党宣言を初め、プルードン、バクーニン、クロポトキン、タッカー等の無政府主義者の著作、その他すべて現行秩序に反抗する一切の主張の文書を見付け、購入して、これによって急に急進文書に対する知識を増し、他面、それに慣れっこになって、驚かなくなったようにも思われると追憶しておられる[2]。

翌一九一三年十一月、ロンドン大学を経て、ドイツのベルリン大学で、シュモラー、ワグナー、ヘルクナー、オッペンハイマーの講義をききき、更にベルリンの商科大学でゾンバルトの講義をきいたが、特にゾンバルトの感銘は深く、彼の名は後

年に至るまで、先生の話題に上ることが多かった。当時ゾンバルトはすでにその名著「十九世紀の社会主義と社会運動」によって社会思想学界に君臨しており、後進者いずれも競うて彼の講筵に参ずるという有様であった。「社会主義と社会運動」の第十版はその標題を「プロレタリヤ社会主義」と改められ、上下二巻千頁という大著として出版され、ゾンバルトのマルキシズムに対する態度もまた前著の傾倒的・共感的から批判的に変った。このことはまたマルクス批判に強く傾いていられた先生の意に投じたものの如く、その出版されるや、先生は直ちに長文の紹介と解説の文を発表されて、ゾンバルトへの共鳴の意を表された。先生は一九一六年三月、五年にわたる留学を終えて帰朝、翌四月、新学期から早速、経済原論、経済学史、社会回顧の講義を担当された。社会問題は昭和の初め頃、特に先生の希望で社会思想史に改められた。[3] 先生は塾長就任の後も社会思想史の講義は昭和十八年まで続けられた。

一九一七年、ロシア革命が起り、第一次世界戦争が終って、ここに戦後の世界にいかなる社会を建設すべきかの問題が起ってきた。当時誰も先の見透しをもっていたものはなく、またそれが当然の次第であったが、しかし、人々が争って社会改造について、今まで思想家によって唱えられた様々の提案について知識を求めたのは当然であった。急進的社会思想はどんなものでも歓迎されるという次第になった。[4]

吉野作造、大山郁夫を擁して論壇を独占し、睥睨していた中央公論の外に、解放、改造その他これに類する名称の大小雑誌が新しくあい次いで創刊され、社会主義、共産主義、無政府主義、虚無主義、サンジカリズム等の紹介と解説と批判とが大いに論壇を賑わした。福田徳三、堀江帰一、河上肇、吉野作造、大山郁夫、中沢臨川等に伍して、先生が高橋誠一郎と共に我が評論界にデビューされたのはこの頃であった。以来、三田学会雑誌を初めとして、これらの綜合雑誌や単行本に、研究や評論に、精魂を傾けられることとなったのである。

（1）小泉信三「私の履歴書」日本経済新聞社。四九頁。

（2）小泉信三「私とマルクシズム」文芸春秋新社、昭和二五年、一〇三頁。「私の履歴書」日本経済新聞社、五〇―五三頁。

（3）社会思想史の講座というものは、多分慶応義塾が私の為めに設けてくれたのが日本で最初のものであったと思う。初めは、社会問題という名称の下に、ハインリヒ・ヘルクナアの名著「労働者問題」の体例にならい、近世労働者問題全般に及ぶ講義をしていたが、段々その中の社会主義思想を取り扱う部分に興味が集まり、またかねて用意のノートもあったものだから、その方に許り力を入れて、他がお留守になったので、名称を社会思想史と改めることを許して貰ったのである。それが昭和の初めであったと思う。それからたしか昭和十八年まで続けた。昭和八年塾長就任後もこの講義は続けたが、戦争で多忙となり、殊に学生の答案を読む時間がなくなったので遂にやめた。（「私とマルクシズム」九六頁）。

（4）小泉信三「私の履歴書」七九―八〇頁。

二

先生が社会思想研究の上に残された数々の業績の中で、特に忘れてはならないものが三つある。

その一つはフェルジナント・ラッサール（一八二五―一八六四）の研究であり、その二はギルド社会主義の日本紹介と研究であり、その三はマルクシズム（共産主義）の研究と批判である。

大正五年（一九一六）先生がヨーロッパ留学から帰朝されて、四月から直ちに講壇に立たれたことは前に述べた。その翌一九一七年（大正六年）の三月と、ついで十一月にロシヤに革命が起り、その翌一九一八年の秋ドイツとオーストリアが降伏して休戦条約が結ばれ、一九一九年には、ヴェルサイユ条約が締結されて大戦は終ったが、この大戦争で戦前のヨーロッパの社会は殆どその根底から変ってしまったように見えた。そこであらゆる種類の社会改造案が提議され、急進国の思想はどんなものでも歓迎されるという次第であった。このような世界情勢の中に、先ずは留学した成果の一端ならんと思われる「フェルヂナンド・ラッサアルと独逸労働者運動」という長論文を三田学会雑誌（第十一巻第五、六、七、八、九、十号）に連載されたが、これが先生の社会思想研究上の事実上の処女作といってよいだろう。以来先生のラッサール研究は、本塾経済学部同

人編集の「経済学説研究」に掲載された「ラッサアルとマルクス」を経て、ラッサール労働者綱領の監訳と、「労働者綱領と共産党宣言」という長論文に至っていよいよ深められている。

先生の「ラッサアルと独逸労働者運動」執筆の動機について、私は後年、先生に直接お尋ねしたが、先生はただ苦笑されるのみで語られず、この若き日の作品について進んで語ることを好まれず、遂に明確な御答をうることができなかったことは呉々も残念であった。

ラッサールはマルクス、ロードベルトスと共に、ドイツ近代社会主義のトリオと言われている。ラッサールは多芸多才の人であった。彼はその短い生涯の最後の二年を労働者運動に捧げた外に、大部なる哲学上法律学上の著述に依て独逸学界に知られ、更に一篇の戯曲を公にし、政治上、外交上、文芸上の時事問題に関して多くの小冊子を著わした。併し彼が死後に残した最も大なるものが其の社会運動上における事業なることは何人もこれを争うものはない。彼の煽動家としての生涯は極めて短かかったけれども、この短かい年の間に彼は多くをなした。一八四八年の三月革命が鎮圧されてから十余年を経て、所謂「新時代」における社会主義運動は一八六三年三月一日、ライプチヒの労働者委員会に与えたラッサールの「公開答書」をもって始まるといわれている。この「公開答書」はやがてラッサールを総裁とする全独逸労働者同盟の組織を促し、そして「同盟」は後にベスベル、リイプクネヒトによって起された労働者組合連合会と提携し、幾多の波瀾を経過して遂にドイツ社会民主党を造るに至ったのである。これが社会民主党が全ドイツ労働者同盟創立の日をもってその記念日とし、またしばしば社会民主党は思想上においてはマルクス、実際運動上においてはフェルジナンド・ラッサールを父とすると称せられる所以である。[1] 先述の「フェルヂナンド・ラッサアルとドイツ労働者運動」は主に労働者首領として、社会運動の指導者としてのラッサールを描くことを主題としたものである。先生はいわれる、「労働者首領は必ずしも思想家たることを必要としない。しかし労働者首領に欠くべからざる資格は、決して単に魅力ある性格言動、及び民衆の熱情を刺激し、鼓舞する技術のみでは終っていないのである。永続的組織的に民衆を動かさんがためには、単に彼らを鼓舞激励するだけに止まらないで、そもそも何故に、又、如何なる点において現行の制度は不当なるか、従って何故に現在制度を改革するは倫理上の価値を実現する所以であるか、そしてまた現状打破の目的を達せんがためには如何なる方向に向って努力しなければならぬかを多少論理的に首肯させなくてはならぬ。即ち理論家決して煽動家として成功するものではないけれども、大労働者首領は必ず理論を有っていなければならぬのである。さてこの点においてラッサアルは如何なるものを有っていたか……是等の理論がどれほどの価値を有し、又それがラッサアルの死後社会民主党によって如何に取扱われたかはわれわれにとって最も興味ある問題でもあり、われわれにとって比較的最も意を安んじて議論しうる問題である。[2]」このような視点から本論文は書かれたものである。

先生は、マルクスと同じくユダヤ人として生れたラッサールの少年時代に、早くも後年労働者首領となるべきラッサールの片影がうかがわれるとして、パウル・リンダムが公にして、ラッサール少年時代の日記について語られるが、その流麗な訳筆と、その高潔にして雄勁なる行文、その気品高い格調とに読者は深い感動をうける。若き日の労作に早くも先生の片影がうかがわれる。

ラッサールはフィヒテ、ヘーゲルから国家的思想を継受し、ロレンツ・フォン・シュタインを通じてフランス社会主義を知り、マルクスの「共産党宣言」からは特に階級闘争の思想を学んだ。彼の国家社会主義の核心はリカードに拠った「賃銀鉄則」と国家補助による労働者生産組合の設立である。彼は「冷酷なる賃銀鉄則」によって資本家による労働者の搾取を説明し、国家補助による労働者生産組合の設立によって、この鉄則の作用を阻止し、国家権力を動かして、この労働者生産組合の結成を援助せしむるために、労働者階級の自主独立な政党と普通平等直接選挙を要求した。このラッサールの社会改造の構想を全体として初めてわが学界に知らしめたのは、先生のこの論文に外ならぬことを決して忘れてはならぬ。

（1）小泉信三「社会問題研究」大正一四年、一五一―一五二頁。
（2）小泉信三「社会問題研究」一五三―一五四頁。

三

先生のラッサールの社会思想の研究は、「フェルヂナンド・ラッサアルと独逸労働者運動」（大正六年）の論文から約九年後の『「労働者綱領」と『共産党宣言』』――ラッサール主義とマルクス主義――に至って、さらに深められた。この時代は先生の研究意欲が最盛期に達した頃かと思う。

「フェルヂナンド・ラッサアルと独逸労働者運動」が労働者首領としてのラッサールをその主題としていたのに対して、「労働者綱領と共産党宣言」はマルクスとの関連に重点を置いて、ラッサールの社会主義を解明し、論評しようとしたものである。

マルクシズムは第一次世界大戦の当時及び戦後において、ある意味で危機に遭遇した。それはドイツ、オーストリヤのマルクス主義者中に明らかにマルクスの国家死亡論に反対する者が輩出するに至ったからである。ハインリヒ・クノウ、オットー・バウエル、ルドルフ・ヒルファジンク、カール・レンナー等がその主なるものであって、しかも常に繰り返して、マルクスの不謬を力説し、マルクスの忠実なる註解者たることをもって終生の本分とするかの如く見えたカウツキーにして、なおこの点においては師マルクスに反対して、「かかる状態（国家なき社会）は、いつか到来することがあるかも知れぬ。しかし現在認識しうるべき実状にはわれわれがそこに到達することを指示するものは一つもない」と明言するに至ったことを見れば、思い半ばにすぐるものがあろう。

このようにマルクシズムが一種の危機に見舞われている反面において、特に世人の耳目に頻りに触れるようになったのが、国家社会主義者ラッサールの名である。この事は既に戦前においてもそうであったが、戦後においては一層喧しく、「マルクスかラッサールか」とか、「ラッサールに還れ」とかという声がしきりに聞かれるようになり、この現象と相呼応するかの如く、ラッサール文献の出版が漸く目立ち、著書論文合計百六十有余が数えられているが、その中にあって最も重要な文献は、修正主義の提唱者として有名なエヅアルト・ベルンシュタイン編纂のラッサール著作、演説全集十二巻（Ferdinand Lassalle', Gesammelte Reden und Schriften. Vollständige Ausgabe. 12 Bänden. Herausgegeben und eingeleitete von Eduard Bernstein. Berlin, 1919-20）、およびグシュタフ・マイヤー校訂の書簡及び遺稿集六巻（Ferdinand Lassalle', Nachgelassene Briefe und Schriften. Herausgegeben von Gustav Mayer in 6 Bänden. Stuttgart-Berlin. 1921-1925）である。「労働者綱領と共産党宣言」は上述の如き、「ラッサール復活」の実状を背景とし、新しい資料と研究成果とを踏まえて作成されたものであって、この点、前の「フェルヂナンド・ラッサアルと独逸労働者運動」と大いに異なるばかりでなく、質的にも大いに前進させたものといってよい。

論文「労働者綱領と共産党宣言」は、ラッサールの著作「労働者綱領」の邦訳に解題（付録）として付けられた七十有余頁に亘る長論文である。まず労働者綱領について簡単に述べておきたい。

労働者綱領は一八六二年四月十二日、ラッサールがベルリン市郊外、オラニエンブルクの手工業者協会において試みた講演である。この手工業者協会は主に機械職工を会員とするものであったが、当日の聴衆はこの講演から格別の感動は受けなかったように伝えられている。しかるに、まもなく、この講演が小冊子として印刷されると、たちまち警察の手に没収せられ、ラッサールは起訴され、ラッサールはその法廷における弁明を小冊子として公刊するなど、すこぶる世間の視聴を動かした。第一版が没収されて後、まもなく翌年の春、ラッサールは更にこの小冊子をスイスのチューリッヒで新たに印刷させた。この時、この小冊子に初めて「労働者綱領」という標題をつけたのである。

「労働者綱領」はマルクス・エンゲルスの「共産党宣言」と同じく、歴史は階級闘争もしくは階級支配の歴史であること、そして現在の時代においては、プロレタリヤはブルジョワジーの支配をくつがえして、全く階級闘争の行われぬ、いな階級そのものが最早存在しない新社会を建設すべき歴史的使命を帯びているものだということをその中心思想とするものである。そしてこの階級別が撤廃された暁には、階級的抑圧機関に外ならぬ国家は不用に帰して消滅する、とマルクスが主張するのに対して、ラッサールはその時に至って初めて真正の国家が実現されるというように説いている。真正の国家とは「国家の道徳的本性」を本質とする国家、「人間の使命を、即ち人間の能くする文化を現実的存在に形成すること、人類の自由への教化及び発展」を目的とするところの国家である。(1)

「労働者綱領」は、ラッサールの公刊著作中において、最も明らかに「共産党宣言」の影響の跡をとどめているものである。マルクス自身はこれを酷評して、共産党宣言その他の悪しき通俗化であるといい、マルクス主義者の批評は概ねこれに唱和するものである。メーリンクがこれを「ドイツの状態の鏡に映じた共産党宣言」といい、リヤザノフが共産党宣言の根本思想の「余程稀釈し、かつ時の法律状態に適応せしめたもの」という類がそれである。「労働者綱領」とはいかなる作品であるか、右に述べたところによって略々明らかにされたことと思う。

「労働者綱領」の翻訳について一言したい。英文からの訳業については、ジェヴォンス「経済学純理」（大正二年、一九一三年）、ディッキンソン「戦争是非」（大正四年、一九一五年）、並びにリカード「経済学及び課税の原理」（昭和三年、一九二八年）などがあり、その名訳筆はすでに定評あるところである。独文からの訳業は一二の断片的なものを除いて、この「労働者綱領」の訳業が唯一のものであろう。ラッサールは無類の名文家として広く知られている。「労働者綱領」は内容、文章共に出色のできばえといわれているが、先生の訳筆は真に錦上さらに花を加えたものであろう。原文に即して生硬におちいらず、平易、適確な訳語と相まって流麗な行文、まことに朗々誦すべき名訳である。

（1）小泉信三「労働者綱領」小泉論、文庫版。

四

わが国に、ギルド社会主義を系統的に紹介し、論評した最初の人は小泉先生であると言っても決して過言ではあるまい。先生のギルド社会主義研究は、一九一七年、「国家学会雑誌」（大正六年、五、六月号）に発表された論文「集産主義、サンジカリズムとギルド・ソシャリズム」に始まり、三年後の「三田学会雑誌」（十四巻二、三、四号）に掲載された論文「再論ギルド社会主義」に及んで、一時、先生の興味を深くとらえていた。同時代に自由主義的個人雑誌「批評」に拠って、同じくギルド社会主義の解説と論評に熱意を傾け、ギルド社会主義の起源について小泉先生と論戦を交えた室伏高信という評論家を忘れえない。思い起す、以来ギルド社会主義は一躍、内外論壇の寵児となり、ギルド社会主義ならでは夜も日も明けぬという、盛況を呈したことを。

ギルド社会主義とはいかなるものであるか。ギルド社会主義は二十世紀の初めにイギリスに生れた一種の社会主義であって、フランスのサンジカリズムやロシヤの共産主義よりも稍々新しい社会思想である。サンジカリズムやロシヤ共産主義がそれぞれ、その生地であるフランスやロシヤ特有の精神的風土から生れたものとすれば、このギルド社会主義は自由を愛し、強権に疎く、中正を好む常識豊かなイギリスの伝統的精神の産物といえよう。先生の言葉をかりれば、「ギルド・ソシヤリズムなるものはイギリス特有の事情の下に、イギリス特有の約束をもって生れた一つの社会主義的学説なのである。(1)」その本質は何であるかといえば、ギルド社会主義は、国家をして、すべての生産手段を所有させると共に、産業管理の仕事を生産者の自発的な団体である労働組合、すなわちギルド・マン（ギルド社会主義者）のいわゆるギルドに委任することである。

ギルド社会主義はいつ発生したか、その起源の問題である。ギルド社会主義研究における先生の創見と認むべき功績の一つはこの問題を解明されたことにある。先生はこれについて次の如く言われる。

「第一にギルド・ソシャリズムは最近の運動であるということを記して置きたい。……元来、思想上の運動はいうまでもなく、実際上の運動でも、それが何年何月から始まったということを明言しうるものは殆どない。そのことはギルド・ソシャリズムについても同様であるが、私は少なくとも、これだけのことは言って差支えないと思う。ギルド・ソシャリズムはいかに古くても一九〇六年より古いことはありえない運動である。更に今少しく進んでいえば、ギルド・ソシャリズムはおよそ一九一一年以後の運動だといっても差支えないかと思う。それはどういう訳かというに、そもそもギルド・ソシャリズムはイギリスの労働党に対する反対として起ったもので、労働党によって代表せらるる労働者階級の政治運動、議会政策、ならびにその目標とするところの社会主義（集産主義）に対する批評から出発しているものである。そしてイギリスの議会に労働党が現われたのは、一九〇六年の総選挙以後の事であるから、ギルド・ソシャリズムもまた一九〇六年以後の運動だということができようかと思うのである。また一九一一年以後というのは如何なる拠りどころがあるかというと、一九一一年は大陸のサンジカリズムがイギリスに輸入された年である。勿論この種の思想の輸入が何年何月に行われたと明確に断言することのできないのはいうまでもないが、大体において、イギリスにおいてサンジカリズムが論議せられ、もしくはサンジカリズムの影響を受けたらしい労働者の活動が行われるようになったのは、まず一九一一年以後であると見て差支えないのである。そしてギルド・ソシャリズムは、サンジカリズムの影響を受けて起ったものであるから、それで一九一一年以後ということが言えようかと思うのである。勿論これにも註釈は必要である。ギルド・ソシャリズムは果して一九一一年来、イギリスに輸入されたサンジカリズムの影響によって初めて生れたものとばかり言うことができるかどうか、あるいは当時のイギリス労働者運動の形勢が、一方においてはギルド・ソシャリズムを生むような空気を作り、同時に他方においては大陸からのサンジカリズムを歓迎するような形勢にあったのではないだろうか。」この点については「どれが原因で、どれが結果であるとはっきり言うことは困難であるが、しかしながらギルド・ソシャリズムがサンジカリズムの刺激を大いに受け、そしてまたその主張の傾向をある程度まで、これと同じうしているということは疑いのないところである。[2]」

すなわち、ギルド社会主義の発生の時期を一九〇六年以後と推定されたことは、たしかに社会思想史研究の上の注目すべき寄与であるといわなければならぬ。

ギルド社会主義はいかにして生れてきたか、その生れるまでの径路そのものを解明することが先生の論文の主題とされている。先生はいわれる、「私が最も興味を感じているのは、ギルド・ソシャリズムなるものは、如何にして生れて来たか、その生れるまでの径路その者である。即ち集産主義とサンジカリズムとの批評からいわば必然的にギルド・ソシャリズムが生れて来たその論理的径路が興味を感ぜしめるのであって、ギルド・ソシャリズムの主張その者を細かく解剖し吟味しようという気はない……。自分はただかかる傾向（集産主義とサンジカリズムとを調和せんとする傾向）の学説が生れてきたという事に専ら興味を感じる……。[3]」

問題はギルド社会主義の成立径路である。そして、先生によれば、ギルド社会主義は、集産主義とサンジカリズムの批評から生れたものである。集産主義の消費者専制が許し難いと同様に、サンジカリズムの生産者専制もまた許す訳には行かぬ。そこで生産者の代表機関である労働組合に対抗するために消費者の利益代表体が必要となる。それは誰がなるかといえば、将来の国家の任務がここに発見せられる。そこでギルド社会主義者は、国家をしてすべての生産手段を所有させると共に、産業管理の仕事を生産者の自発的な団体である労働組合、即ち彼らの所謂ギルドに委託することを主張する。かくて集産主義の陥る消費者専制の弊害は、ギルドが消費者利益の代表者たる国家に対抗することによって防止し、サンジカリズム

の陥る生産者専制の弊害は消費者利益の代表たる国家がギルドに対抗することによって防止しようという仕組である。反対からいえば、ギルド社会主義は集産主義が軽視した小生産者の利害とサンジカリズムの閑却した消費者の利害とを双方共に尊重して、生産者の団結であるギルドと消費者の団結である国家との権力の均衡の上に、将来の社会における調和を見いだそうとするのである。[4]

ギルド社会主義の生成と本質は大要以上の如くであるが、先生はギルド社会主義の実際上の価値については、極めて消極的であった。「このギルド・ソシャリズムの実際上の価値については、私は余り興味をもっていないが、その価値は少ないと言ってよかろうと思う。即ちギルド・ソシャリズムは実行しうる見込が少ないというのである。[5]」といわれ、その理由として、先生は左の三つの理由を挙げられる。

その一は、この派の機関紙「新時代」（New Age）という雑誌は高級な雑誌であって、一般の民衆に接触していないから勢力ある実際運動を惹起することが難かしい。

その二は、ギルド・ソシャリズムを実現するためには、一産業に属するすべての労働者が団結して一つの組合を作ることを必要とするが、この事の実現は近き将来に到底予期することはできない。

その三、ギルド・ソシャリズムを実行するためには、現在のイギリスの労働組合組織を根本的に変えなければならぬ。craft unions を変じて industrial unions にしなければならないが、イギリスの現状ではこれを実現することは望めないからである。[6]

このように「実際上の価値も少なく、その実行しうる見込が少ない」と先生によって予測されたギルド社会主義の運動は、先生の予期に反して二、三年にして予想外に世の反響を喚び起して、新聞や雑誌に「ギルド・ソシャリズム」なる文字を見ることは漸く頻繁となった。[7]そこで先生は「この運動の極めて幼稚な状態にあって、参考すべき書籍もなお乏しかった」時に書かれた論文「集産主義、サンジカリズムとギルド・ソシャリズム」を補足する意味で、再びギルド社会主義全般について筆を執られたのである。これが三田学会雑誌（十四巻、二、三、四号）に連載された論文「再論ギルド社会主義」である。

この論文は前の論文に比べて、その叙述が遙かに精細になっているが、前論と同様に、ギルド社会主義実現の前途に横たわる最大の障碍はクラフト・ユニオンからインダストリアル・ユニオンへの労働組合の再編成が現実的に至難であるということにあることを反覆強調され、その実例として、ギルド社会主義者が最も望を嘱している鉄道従業員全国同盟の場合について媒体的に説明される。この最も有利なる場合にして然り、他は推して知るべし。「これだけの事実に基づいて、私はギルド・ソシャリズム実現の準備は未だできていないと論説する。これは私一人の独断ではない」とギルド社会主義の代表的理論家コールの見解を援用される。「それではギルド・ソシャリズムは全く実際的の価値を有せぬものであろうか」と自問され、「私はそうは思わぬ」と言われ、次の如く結んでいられる。「ギルド・ソシャリズムは少くも消極的のメリットをもっている。ギルド・ソシャリズムの実現には障碍がある。しかし今日のイギリス労働者は産業の国有だけでは満足しなくなっていると同時に、彼らの大部分はサンジカリズムの短所を知っている。すでにこの両極のいずれをも取らぬとすれば、彼らは如何なる方向に志すであろうか。ギルド・ソシャリズムの実現は困難であっても、ギルド・ソシャリズム以前の方向はイギリス労働者の進むことを更に一層喜ばぬ方向である。この意味において、私はギルド・ソシャリズムには消極的のメリットがあるというのである。[8]」

当時、学界や言論界は競ってギルド社会主義を扱ったが、この間にあって、先生は暫然指導的役割を演じられた。

ギルド社会主義は建築業を初め若干の産業において、一時急速な発展を見たのであるが、一九二二年建築ギルドの瓦解を転機として、イギリス経済の不況と共に運動としては衰退するに至ったのであるが、その思想はイギリス社会主義や労働運動の上にかなりの影響を残している。これと共にギルド社会主義は先生の関心からも次第に遠ざかって行ったのである。

（1）小泉信三「社会問題研究」大正四年、改訂版、岩波、二八五―二八六頁。
（2）小泉信三、前掲、二八六―二八八頁。
（3）小泉信三、前掲、三一四―三二〇頁。
（4）小泉信三、前掲、三二三―三二四頁。
（5）小泉信三、前掲、三二五―三二六頁。
（6）小泉信三、前掲、三二六―三二七頁。
（7）小泉信三、前掲、三二九頁。
（8）小泉信三、前掲、三九八頁。

五

先生の社会思想研究の主力は何といってもマルクシズムに注がれた。そして先生のマルクシズムへの関心は深く、その生涯を通じて渝ることがなかった。その著作「社会問題研究」（一九二〇年）から「マルクス死後五十年」（一九三三年、増大版一九四六年）を経て「私とマルクシズム」（一九五〇年）に至るまで、先生の学問的著作は殆どすべてマルクシズムの分析と批判と克服の努力に大きく貫かれているといって過言であるまい。

では、どうして先生は特にマルクシズムに興味をもたれることになったのであろうか。

先生が大学在学中、日本の所謂「危険思想」弾圧時代に、ひそかに国禁の書「共産党宣言」を幸徳・堺共訳で読まれたことはさきにも述べたが、おそらく、これが先生にマルクスへの興味の糸口を与えたものと思われるが、しかし、マルクシズムの科学的研究の扉を先生のために初めて開いたのは先生の恩師福田徳三博士であった。これについて、先生は次のように述懐しておられる。

「青年の私に、あるいは吾々にマルクスを吹き込んだのは慶応義塾で経済原論を吾々に教えた福田徳三博士であった。それは今から四十年ほど前の明治四十年の頃で、福田博士のマルクス理解は、今思えば当時まだそれほど高級のものではなかったと回想されるが、ともかくも博士は当時の日本で、原文で資本論を読んだといわれる極く極く少数の一人であり、世間一般の無知識に乗じて随分マルクスを振り廻したものである。堺利彦その他当時のマルクシストに対しても、幾らかマルクスを教えてやるという態度を見せた嫌いもあった。……マルクスに対する態度を敵味方と分ければ、博士は結局反対陣営に属する人ではあったが、それでも終始マルクスのファンであった。……省みれば私自身も幾分そうであったと言えるが、福田博士は一層そうであった。……福田博士によってマルクスを教えられ、博士と共にマルクスに牽引を感じながら、私の方が師よりもマルクスに対して冷静若しくは無遠慮であったといえるかも知れない。……とにかく、私は右の通り、割合に夙くマルクスをかじっていた。[1]」

先生は「ドイツ大学教授の中で最も夙くマルクスに惹き着けられ、その価値を認めた」人の例としてゾンバルトとシュタムラー（スタムレル）の名をあげ、師福田博士を「結局反対陣営に属する人ではあったが、それでも終始マルクスのファンであった。……省みれば私自身も幾分そうであった」とご自身のことは控え目に述べておられるが、私の長年の印象から言えば、先生は共産主義（ロシヤ共産主義、ボルシェヴィズム）に対して終始苛烈な追撃の手を緩められなかったけれども、マルクスに対しては、その「冷静」なる批判的態度にもかかわらず、ゾンバルトやシュタムラーや師福田博士と同じく、あるいは一層のファンではなかったかと思われる。このことは先生の社会思想史の講義内容によっても端的にうかがわれる。先生は言われる、「長年の講義の間に、私は多くの社会主義者に興味をもった。ラッサール、ロードベルトスの国家社会主義に興味をもって、少し読んだことがある。十九世紀末における各国社会党運動の平俗化に慊らずして起ったフランスの革命的サンジカリズム、それの一派生物とも見られるイギリスのギルド社会主義、サンジカリズムと親縁ある無政府主義等も、次ぎ次ぎに興味の対象となった。しかし、何時も中心にいるのはマルクスであった。ロードベルトス、ラッサールを論ずるに

も、サンジカリズムや無政府主義を論ずるにも、やはり話はマルクスに帰ってくる。事実、十九世紀後半の社会主義思想を、マルクスを度外して論じられないことは誰がやっても変りはないだろうが、私は格別の関心をもってそれをした。それは青年の頃からマルクスに特殊の興味を抱いていたからである。[1]」と述べられ、また他の個所で「社会思想史の講義を始めた頃は、十八世紀の産業革命から説き起こして……主として英仏独三国について社会主義思想の全発展を叙述したのであったが、段々にその中でマルクシズムの比重が加わり、仕舞にはマルクシズムの叙述とこれに対する批判とが講義時間の大半を占めるようになった。[2]」と述懐しておられる。このようなマルクシズム中心の講義を行われたことは「一つには、マルクシズム自身の思想的、理論的価値そのものに由るものである。[3]」ことは勿論であるが、それ以上に、マルクスに対する先生の「格別の関心」と「特殊の興味」に由ったものであると私は確信する。先生は、ある意味でマルクスのファンであった。そしてこのことは、先生のご生涯を通じて変らなかったように思う。

（1）小泉信三「私とマルクシズム」昭和二五年、文芸春秋新社、九六―九七頁。
（2）小泉信三、前掲、一〇七―一〇八頁。
（3）小泉信三、前掲、一〇七頁。

六

マルクシズムが哲学的には唯物弁証法、社会学的には唯物史観、経済学的には余剰価値論、政治学的には革命理論の諸要素によって有機的に構成された一大社会科学体系であることは世人のよく知っているところである。先生の批判は、その精疎は別として、これらの諸構成要素の全体に及んでいるが、その批判の俎上に最初に上ったのは余剰価値論を繞る経済学の面であった。しかし、これについて述べることは私の分担外であるから、私は専ら、それ以外の面に対する先生の批判について述べたい。

まず唯物弁証法の問題であるが、マルクスによれば、プロレタリヤによる私有財産の廃止、共産主義の勝利によって、世界史はその究極点に到達し、人類はその為しうる限りの最高の発展を成就したものとされているように感じられる。もしも史的発展がいわゆる弁証法によって行われるならば、即ちもしも一事物は必ずその内から自己に対する否定を生みだしきたり、この肯定と否定との矛盾が一段高い否定の否定への発展によって止揚せられ、このより高い段階は更にその中から自己に対する否定を生みだしきたり、更に第二の矛盾の止揚が行われるものとするならば、そこに無際限の発展が行われなくてはならない筈である。しかるにマルクスの言説によれば、共産主義の実現によって、人類はまさにその到達すべき本然の状態に到達、もしくは復帰したものとせられているようである。共産主義の実現以前において人類が幾度となく繰り返してきた生産力と社会形態との衝突、またそれを反映する階級と階級との闘争が、共産主義実現以後の歴史においても更に際限なく反覆されるのだとは説かれていないのである。唯物弁証法を教えられた者の中には当然疑問を起すものがあるであろう。謂わく、物的矛盾の止揚によって共産主義が実現されるように、共産主義の中から更にそれに対する否定が生れいで、例えば原始共産体が崩壊して、私有財産制度が起ったように、将来の共産主義の中から更にこれに対する否定として新たなる私有財産制度が生じくるのではなかろうかと。しかしマルクスは将来の共産主義から「弁証法的に」生れ出で来るべき、共産主義そのものに対する否定の事は説かぬ。矛盾の止揚による発展といい、悪しき一面が善き一面を克服することによって行われる歴史の進行というのは、ただ共産主義実現に至るまでの歴史について言われたものであるか。あるいは人類の歴史のあらゆる段階について適用があるのであるか。読者は必ず尋ねたいと思うであろう。マルクスの著作によれば、それは全然説かれておらず、彼の文言及び言外に感ぜらるる印象からいえば、共産主義社会は人類最後の歴史的段階であって、それ以上の発展は想像思議すべからざるものであるかのようである。しからばいわゆる弁証法的発展は、共産主義社会の実現

せらるるその時まで世界を支配し、共産主義の実現せらるると共に、忽然として永遠に停止するというのであろうか。[1] 以上が唯物弁証法に対する先生の批判の要旨である。

まことに肯綮に当った評語であって、私もかつて同趣旨の疑問を述べたことがある。[2] しかもこれに対して、今日に至っても尚満足すべき解答が与えられていないという有様である。いわゆる古くて新しい課題であり、この意味でも先生の指摘は当を得たものであり、充分意味深いものであると思う。

次に唯物史観である。

先生は唯物史観が史学上、社会学上に多くのメリットを果していることを充分承認される。それは人間の経済的活動と社会形態の変化との関係の考察が、マルクスによって多大の進歩を遂げたこと、これである。一つの新たなる社会秩序の実現に向ってする努力は、倫理的に基礎付けられねばならぬ。しかしこれらの努力の成功するか否か、あるいは果してどの程度まで成功するかは、与えられた条件の如何にもよることであって、決して彼らの努力如何によってのみ決せらるるものではない。否な、この努力そのものが勝手気儘に起るものではない。人間はその精神的視野の限界内に入りきたれる事物以外のものは問題にしないし、問題にできないのみならず、明らかに遂行不可能なことは当初からその遂行を企てない。故に一つの新たなる社会形態の実現に向ってする努力そのもの、又、その努力の成否如何ということが、既に与えられた現存の社会事情に極めて強く拘束せられていると共に、又新社会実現に向っての努力が起るということとそれ自身が、すでに現存の状態の中にこの努力を促し起こすべき原因があり、かつこの努力の成功の条件と認められるものが既に存立することを示すものだと見て好いのである。故にマルクスの、人間は自らその歴史を造るが、「しかし人間はそれを自由なる材料から造らず、自ら選択した事情の下に造らずして、直接目前に与えられた、伝来の事情の下に造る」と言い、又「人類は常にその解決しうる

課題のみを自ら課する」という言葉は、社会的考察にとって極めて価値ある真理を含んでいる。この事は充分力説しなければならぬ。マルクスの功績は社会を営む人間の経済行動と、人がその内に生活する社会形態の変化との関係の考察に多大の光明を投じたことである。先生はこのように唯物史観をある意味では高く評価される。

先生が唯物史観の疑問点（欠点）として、いろいろの機会に、いろいろの著作の中で、終始、指摘し、強調されている点は、唯物史観に含まるるところの共産主義必然論と社会運動の論拠とをいかに調和せしむべきかということである。

唯物史観は理想を排斥し、倫理を排斥する。マルクスは資本制社会において、労働搾取の行われることが不当であるから、それを改めようと主張するのではない。[3] 彼は、物的生産力の発展が封建制度を崩壊せしめたと同様に、今又それは資本主義それ自体の存続を不可能ならしめ、必然的に社会主義を出現せしめると主張すると共に、社会主義の根拠を道徳的理想に求めることを排斥しようとしたものである。[4] これに対して先ず起る疑問は、もしも社会主義社会の出現が生産力発展の必然の結果であるならば何処に社会主義運動の必要があるか、ということである。[5]

先生によれば、これは恐らく始めてマルクシズムに接した者の皆な一度は懐く疑問である。そしてこれは、マルクシズムを信仰個条としている者は別として何人にも当然起されねばならぬ筈の疑問である。この疑問は従来幾度となく学者、非学者によって提起せられてきたが、マルクス主義者は一種の警句かあるいは罵言をもってする外これに答えていない。これは唯物史観に対する最も幼稚な質問であって、かつ同時に又最も問題の核心にふれた質問であるといわれる。[6]

もしも歴史的因果の系列が絶対的に変更し難いものとして将来に向ってすでに決定しているという意味において、必然的であるならば、一切の人間の努力、従って社会運動は全く無意義であり、よし歴史は人間の心意を通じて経過するとしても、それがかかる絶対的の意味において必然的であるならば、それはあたかも「朝日よ、昇れ」「四季よ、循れ」といって

努力するにも等しいこととなるであろう。[7]

マルクスは革命理論家たると共に革命実践者たるものである。彼は無論、世界の「解釈者」たちに甘んじないで、これを実践的に変革せんと欲するものである。そのために彼は「共産党宣言」を読んで「万国のプロレタリエルよ、団結せよ」といっている。しかし「已に何々せよ」というからには、放って置けばそうならぬ可能性を認め、又「何々する」ことが価値ある目的を達するための手段であることを認めていなければならぬ。「団結」の結果としてえらるるものが価値なきものであるならば、そのために「団結せよ」ということは無意義である。団結すると否とにかかわらず、ある状態が実現せらるるものならば、「団結せよ」ということは、同じく無意義である。この場合、社会主義者にとっての問題は正しき目的に対する正しき手段如何の問題であって、これに対する答は倫理的確信に基づくものでなくてはならぬ。そしてもしも倫理的確信に基づく問題であるならば、社会主義の到来は必然ではない。必然の支配する所に倫理的判断は成り立たないのである。[8]社会主義の到来は真に必然であるか。しからば社会主義運動は無意義である。社会主義運動は有意義であるか。しからばいわゆる必然は認識せられたものでなくて、単に希望せらるるものであるか？　しからずんば、社会主義運動将卒の志気を鼓舞する激励手段たらしめんとするものであろう。[9]

マルクスの説く共産主義必然論は絶大の魅力をもって人に迫る。しかしこの必然論には多くの誇張または希望的観測が含まれている。資本主義社会の発展は、境遇の相同じき労働者階級を膨大せしむること、生産を大経営に集中せしむること等によって、社会主義の実現を促し、もしくは可能ならしめると見らるべき事情を造るという点において、社会主義に対してある可能性を示すということはたしかである。進んでひとり可能であるのみならず、ある蓋然性を示すということができよう。ここに社会運動の理由がある。しかし、これが言いうる極限であって、それ以上進んで、共産主義は必然であるということは、政略的揚言か希望的観測におちいるものであって、経験科学の領域内において、これを承認せしむべき根拠はない。たしかにマルクスも言う通り、人間は勝手気儘に歴史を作るのではなく、与えられたる材料をもってこれを作るに相違ないけれども、かくして作られる歴史としては、幾多の可能の途が開かれている。その幾多の途の実現公算は同一ではない。そのあるものは他のものに比べて、より多くの蓋然性をもつ、とまでは言うことができる。経験科学の領域内において、吾々の言いうるところはここに止まり、それ以上にでることはできぬ。[10]要するにマルクスの共産主義必然論は、一つには、世界史をもって既定の究極目的に向っての進行と見る形而上学に基づき、一つには社会主義者のかくあれかしと願うところのものと必ずかくあると認めるところのものとの善意の混同にいで、また一つには社会運動上において、同志者を激励し、反対者を志気阻喪せしめんがための政策的揚言として聴くべきものである。

マルクシズムはそれが形而上学に立脚する限りにおいては、もとより経験科学の範囲外に属する。かくあれかしと願うところのものとかくありと認めるところのものとの混同は、これは錯覚であるから問題にはならぬ。もし又それが政策的揚言であるならば、それはその本質が明らかになった瞬間に効力を失う。いずれの点から見ても共産主義必然論は成立しない。各々の言いうることは、ただ社会主義者の努力はそれに有利なる、また不利なる様々の条件の下に行われる。その条件のいかんによって社会主義の実現は可能であるし、もしくは蓋然的であると言うにつきる。それ以上に進んで、必然と言えば、それは上記の場合のいずれかに帰着するであろう。そして社会主義者の努力そのものの根拠は倫理的根拠でなくてはならぬ。ある社会形態を実現しようとする努力はその社会においてより美しき、より正しき生活が保障されたという確信以外のものをもってジャスチファイすることはできぬ。それを憚り、もしくは含羞んで、ただ言葉の表面で倫理を排斥することは全く無益の所為である。以上が先生の所見の要旨である。実に強靱にして明快なこの論理に唯々敬服の外ないが、いまだにマルクス主義者側からも唯物史観の信奉者側からも、これに対する批判、反論を聞きえないことはまことに遺憾千万である。

（1）小泉信三「マルクス死後五十年」好学社、昭和二十一年、二六―二八頁。「共産主義批判の常識」一二六―一二七頁。

（2）平井新「社会思想概論」三一三―三一四頁。
（3）小泉信三「マルクス死後五十年」一一六頁。
（4）小泉信三、前掲、一五二頁。
（5）小泉信三、前掲、一五二頁。
（6）小泉信三、前掲、一五二、一五六頁。
（7）小泉信三「共産主義批判の常識」新潮社、昭和二四年、一二四頁。
（8）小泉信三、前掲、一一六―一一七頁。
（9）小泉信三「マルクス死後五十年」一五六頁。
（10）小泉信三「共産主義批判の常識」一二四―一二五頁。

七

最後にマルクスの国家論に関する先生の研究について述べよう。

この問題に関する先生の主なる作品は、先生が大正十二年に三田学会雑誌に発表された論文「マルクシズムと国家」（思想、大正十四年二月）とである。いずれも博引傍証、すこぶるアカデミックな、精力的な長論文であって、おそらく先生の諸作品の中で第一に推さるべき傑作であろう。まずこの論文の書かれた当時の背景について一言しておきたい。

わが国で初めてマルクスの国家論について、高い水準の、系統的な学術的研究を発表されたのは小泉先生の恩師福田徳三先生であって、その論文「マルキシズムとしてのボルシェヴィスム」は、中央公論、改造と相並ぶ大評論誌であった「解放」の巻頭を飾ったものであるが、それは今日においてもなお充分高い学術的価値をもつものである。福田博士はこの論文で次のようなことを書いていられる。

この度の戦争（第一次世界大戦）の産物中、我々経済生活研究者にとって最も密接な関係のある産物は、二種の紙製品である。而して両者ともその重要は主として、数量の上における著大なる増加という点にある。実質に至っては、一は明らかに驚くべき低下を示しており、他は低下したものもあり、又向上発達したものもある。その両者とは何であるか。答えて曰く、第一は不換紙幣、第二はマルキシズム文献の刊行物これである。不換紙幣もマルクス文献もまず我々を驚ろかすことはその数量の上における前代未聞の増加である。……さりながら文献の大なる増加の点からいえば、到底マルキシズムに関するものに凌駕するものではない。実にマルキシズム文献の増加は驚くべきものであって、到底一人の力でその一班を素読することすらできかねるのである。而してその数量の増加は実質上の低下をきたしたか向上をきたしたかというと、その大部分についてはむしろ低下したといわざるをえぬ。尤もそれはマルキシズムの場合のみではない。例えば無政府主義就中クロポトキンに関する文献なども私の接手しただけでも新しい独逸訳が数種あって、いずれも何千部と重刷しているようである。しかし文献洪水の最大なるものはマルキシズムにあることは争を容れないところと思う。……故にレーニンは嘲っていう、「ツヒ先頃までは、マルクスと言えば、一言の下にこれを斥くるか、もしくは全く無知を誇示するを常例としていた大学教授等は、今やマルクスについて何事をか、発言するか著作するかせねば、学者の本分を欠くもののようにその考え方を改め出した」と。これは実に適評である。福田博士はこのように当時のマルキシズム研究の盛行を語られた後更に言われる、「独りこの間にあって、我々研究者が目を張って驚異の念をもって迎えねばならぬ二個の大産物がある。一は先頃物故したカール・リープクネヒトが一九一六年から一九一八年に渉って獄中において起稿した『マルクス評論綱要』と題する、マルクス価値理論の根本的批評の一篇である。……二個の大産物の第二はウリアノフ（レーニン）の著 Staat und Revolution: die Lehre von Marxismus vom Staat und die Aufgaben des Proletariats in der Revolution (Die Diktatur des Proletariats) I.A. 1917 4 A. 1919 これである」[1] と。

レーニンの「国家と革命」を第一次世界戦争が生んだマルキンズム文献が二大産物の一つとまで激賞された福田博士の讃辞はなお続く。曰く、「この書は粗ぼ厳密の意味にての文献考証的研究を載するものであって、プロパガンダ文書でないは勿論、同種類の書中、最も学問的に冷静な思索の跡を十分に示すものであるからである。この書において、我々は殆どレニンが今ソヴホエット露西亜の統領たることを忘れしめられる。この書において我々の前に立つものは一学究であって、それ以外の何者でもない。通篇百二頁一言の疾呼強叫を聞くことなく、一歩は一歩と畳みかけて論理の条理を必然と辿ってゆくものである。私はこの書を読んで兼ねて想像しておったレニンとは全くの別人に接したことを驚くものである。レニンは単なる煽動政治家ではない、否彼が主題とするところにおいてはドイツ社会民主党第一の学者たるカウツキーもその学者的態度において確かに彼に一等を輸するものである。疑うものは乞う、レニンの「国家と革命」をカウツキーの「民主政か独裁か」と対照熟考せよ。決して私が言の妄ならざるを見出すであろう。」[2]とまで極言されて、その傾倒の程を示されている。今、福田博士の評言の当否はしばらく措くとしても、このことはレーニンの「国家と革命」が内外に与えた反響の一端を示したものといえよう。

「国家と革命」の制作の目的については、レーニン自身に語らしめよう。

「われわれは、初めに、マルクスとエンゲルスの国家学説を考察し、この学説の忘れられた側面もしくは日和見主義的に歪曲された側面を、とくに詳細に論じる。次ぎに、これらの歪曲の主要な代表者であるカール・カウツキー、現在の戦争中に極めてみじめな破産をとげた第二インターナショナルの最も有名な指導者であるカウツキーを特に検討する。最後に、一九〇五年の特に一九一七年のロシヤ革命の経験から主要な結論をひきだすであろう。一九一七年の革命は、見たところ、現在（一九一七年八月初め）その発展の第一段階を終えようとしているが、しかしこの革命全体は、一般に帝国主義戦争によってひき起されるプロレタリヤ社会主義革命の連鎖の一環として初めて理解されうるものである。こうしてプロレタリヤ社会主義革命の国家に対する関係の問題は、実践的＝政治的な意義を獲得しつつあるばかりでなく、資本の束縛から自己を解放するためには近い将来に、何をなすべきかということを大衆に解明する問題としても、極めて切実な意義を獲得しつつある。」[3]

これまで国家論という社会主義体系にとって極めて重要なる問題が殆ど全く顧みられなかった。無論これにはマルクスが自ら系統的な国家論を書かなかったことにも原因があろう。しかるに「国家と革命」の出版によって、今更の如く、その重要性に気付いて社会主義の国家論が国の内外において、かまびすしく論議せられるに至ると共に、国家論は社会主義体系の高座にすえられることとなったのである。レーニンの、マルクスの国家論という未踏の処女地に初めて鍬を入れた開拓者としての労苦と社会主義における国家論の重要性に対して注意を喚起した功績とは、しばらく彼自身に対する好悪を超越して、十分これを認めなければならないであろう。レーニンの挑戦にカウツキーがドイツ社会民主主義を代表する立場からこれを反駁して、激烈な論争が展開されて以来、内外の著名な学者や論究が相次いで、これに参加するに至った。マウトナー、クノー、ケルゼン、アドラー、[4]福田徳三氏らがこれである。そして小泉先生もまた研究と論争に参加されて大きな役割を果されたのである。このようなわけで、マルクスの国家論はレーニンの「国家と革命」を離れてはこれを語ることはできない。先生のマルクスの国家論の研究も無論、「国家と革命」を契機として進められたものである。先生も福田博士と同様、「国家と革命」を高く評価して、「レーニンその人は甘美若くは迂遠な理想家型とは反対の、最も現実的な革命家であり、「国家と革命」は痛切な現実的必要の為めに書かれたものであったが、同時にそれはマルクス、エンゲルスに関する博大なる文献的学識を以て書かれた、或る意味でのアカデミックな体裁の著作であった」[5]といわれている。

先生のマルクスの国家論の研究は、この「国家と革命」によるマルクス国家論の新解釈に対する批判として展開される。

先生の見解の要旨は根本的に次の如くである。

レーニンは当時通用の二つの見解に反対した。マルクシズムは無政府主義とは違う、無政府主義は国家を否定し、マルクシズムは国家を肯定するという解釈がその一つ。いま一つはプロレタリヤによる国家権利の掌握、すなわちブルジョワ国家をプロレタリヤ国家に変えることは平和合法的なるデモクラシーの方法によって可能であるとする見解である。レーニンはこの二つのいずれにも反対した。マルクシストもまた国家なく強制権力なき自由社会をその最終目標とするものである。この点、無政府主義者の期するところとはまさしく同じであると明言するとともに、プロレタリヤが国家権力を掌握するため暴力革命は絶対的に必要であることを強調した。そうして、それを、前述のとおり、自家の見解としてでなく、マルクス、エンゲルスの唯一の正しき解釈として強調した。

国家の否定に関連して、エンゲルスの「反デュウリング論」の一節に、生産手段の国有化が行われた後において、国家権力の社会的関係に対する干渉は漸次不要となり、「ついで眠りに落ちる。」物の学理と生産過程の指揮とが人間に対する統治に代り、「国家は撤廃せられずして死亡する」云々という文言がある。この文言は国家が平和緩慢の過程で消滅することを解いたものと解せられ、一見暴力革命必要論と反対の印象を与えぬとも限らない。レーニンは極力それを戒める。「死亡」するというのは、ブルジョワ国家ではなくて、それに取って代って、生産手段を国有に移し、階級別撤廃のことを行うプロレタリヤ国家にほかならぬ。ブルジョワ国家そのものは、どこまでも暴力革命によってのほか撤廃せられ得ない。それがマルクス、エンゲルスの真色であるということが、かれの反復して力説するところである。レーニンはそれを五ヵ条に分けて説く。念のためそれを紹介しよう。

第一、エンゲルスはプロレタリヤは国家権力の掌握によって階級別を廃止し、「また国家を国家として廃止する」といったが、これは一八七一年のパリ・コムミュンの経験を約言したもので、かれはここではプロレタリヤ革命によるブルジョワジイ国家の「廃止」を意味したのである。これに反し、死亡という語は、社会主義革命後におけるプロレタリヤ国家の残骸に関するものである。この革命後において、プロレタリヤ国家もしくは半国家は死亡するというのである。

第二、エンゲルスによれば、国家は「一個特殊の抑圧権力」である。したがってプロレタリヤを抑圧するためのブルジョワジイの特殊権力は、プロレタリヤの「特殊抑圧権力をもって代えられねばならぬ」（無産階級独裁）。それがすなわち国家としての国家の廃止である。しかしてこのブルジョワジイの抑圧権力とプロレタリヤ抑圧権力の交代は、断じて「死亡」という方法をもっては行われ得ない。

第三、エンゲルスのいわゆる国家の死亡または入眠は、「社会の名においてする（国家の）生産手段掌握」以後、すなわち社会主義革命の時期に関するものである。しかしてこの時期における「国家」の形態はもっとも完全なるデモクラシイである。ブルジョワ国家はただ暴力革命のみがひとりよくこれを廃止する。国家自体、すなわちもっとも完全なるデモクラシイはよく死亡し得るのみである。

第四、エンゲルスの国家の死亡という語は、ただに無政府主義者に反対するばかりでなく、また「自由なる民衆国家」という成語の流布者にも反対するものである。エンゲルスはこの成語を煽動上の理由からしばらく寛仮したに過ぎず、学問的には不完全なものとしてこれを排斥した。いやしくも国家なるものは、いずれも抑圧権力であるから不自由なるものである。

第五、エンゲルスはマルクスとともに、常にブルジョワ国家に関しては、暴力革命の不可避を説き、ドイツ社会民主党員に向って一八七八年から一八九四年にいたるまで、執拗に暴力革命の讃美歌を歌って聞かせた。しかしそれはけっして論争上の興奮の結果でもなく、大言壮語でもなく、じつに民衆を暴力革命に関する見解に教育するというその必要

に出でたのである。

以上の説を綜括してレーニンは、「プロレタリヤ国家をもってブルジョワ国家に代えることは暴力革命なくしてこれを行うべからず。プロレタリヤ国家の排除、すなわち国家そのものの排除は『死亡』の方法においてのみ可能である」といった。[6]

これに対して先生は批判される。曰く、はたしてこれがマルクス、エンゲルスの解釈として正当であるか否か。これは厳密なマルクス文献の引証に基づいて論定しなければならぬ事柄であるが、ただ革命の問題に関するレーニンその人の思想や主張そのものは、一点の疑いもなく明白である。そこでマルクスの解釈論としての当否如何ということであるが、まず結局における国家の消滅ということについては、レーニンの解釈は疑いもなく正しい。マルクス、エンゲルスが、プロレタリヤ国家によって生産手段の国有化が行われ、階級別の撤廃せられた暁において、国家は「死亡」という過程でみずから消滅すべきものであると考え、かつそう説いたことは、かれらの思想の由来から見ても、またその文言に徴しても十分明白で、争う余地はなかったはずである。

この点においてカウツキー以下ドイツ社会民主党のマルクス主義者が従来とかく言語を曖昧にして、これほど明白なことを明白にしなかったことは、レーニンの指斥を受けてもいたし方ないところであった。この点を明らかにして疑義なからしめたのは、マルクス解釈上における一つの顕著なレーニンの功績であると先生は[7]レーニンの解釈に賛意を表される。

このようにレーニンのマルクス考証は「マルクス国家論の解釈としては疑もなく、正しいけれども、現在若しくは実証的に予見し得べき将来の現実世界の記述としては、国家死亡論は今日も早や真剣な考察の対象とされなくなっていることが当然である」と述べられて、国家死亡論について積極的な批判をされる。

そもそもマルクス、エンゲルスが、生産手段の国有に移されて、階級別がなくなった暁には国家は死亡するといったのは、果してどれだけのことを意味するのであるかを考えて見る。それは果して、その暁には一切の強制的拘束がなくなって、各人の恣意行動が全く放任許容されるという意味か、それとも、国家がないということは必ずしも強制が存せぬというのではなく、単に階級的抑圧が除かれるというだけのことに過ぎないのであるか。マルクス、エンゲルスの様々の文言には、この何れの解釈をも容れ得る余地があるように見える。レーニンは国家の消滅を前の意味に解しているが、そもそも大規模なる社会主義計画経済の下において、各個人の恣意自由の行動を許すということは、到底考えられぬ。計画経済においては、自由経済におけるよりも遙かに多くの強制が当然必要となるものと見なければならぬ。

しからば国家「死亡」の後においても、生産過程その他における個人行動の強制は依然として存し、ただ階級抑圧だけが除かれるものと解すべきであるか。マックス・アドラーのごときはこの解釈を取り、しかしてこの解釈の根拠もたしかにマルクス、エンゲルスの文言中に求められる。しかし、かかる状態は国家社会主義者例えばラッサールが、第三階級（ブルジョアジイ）の支配が第四階級（プロレタリヤ）によって覆えされ、国家がその本来の使命を行う状態として想い描くところと本質的にどれほどに違ったものであるか。ラッサールが国家の完成と見るその同じものを、マルクスが国家の死亡と見るだけの差違に帰着するものではないか。

しかもその同じマルクス、エンゲルスは無政府主義者に対する場合には、実質上国家たるものを単に名称の上だけ別の名で呼ぶことが無意義であることを指摘した。例えば、エンゲルスはある人に与えて（一八七二年）バクウニンの無政府主義を批評した手紙の一節に、「究極において決断を下す一つの意志なくして、すなわち統一的指揮なくして、いかにして工場を経営し、汽車を走らせ、船舶を航行せしめんとするか」と問うた。「またわずか二人の人間から成る社会であっても、各人がその自主権の一部を放棄することなくして、いかにしてそれが成り立ち得るか。これもバクウニンの不問に附するところである」といって、恣意行動の許容し難いことを説くとともに、バクウニンが主張する「保塁保民委員（Barrikadentribünen）

という無政府組織」が実質上は国家と択ぶところがないものであるという理由を述べて「名は毫も実を改めぬ」と言ったことがある。（一八七三年三月、第一インターナショナル総務委員の秘密回状の一節）この語は直ちに移してマルクス、エンゲルス自身の国家死亡論に対する評語とすることができる。このように、先生は主張される。

（1）福田徳三「ボルシェヴキズム研究」改造社、大正一一年、一―一二頁。
（2）福田徳三、前掲、一五―一六頁。
（3）レーニン「国家と革命」岩波文庫版、一二頁。岩波文庫版一〇―一一頁。
（4）Mautner; Der Bolschewismus. 1920.
Cunow; Die Marxsche Geschichtsgesellschaft und Staatslehre.
Kelsen; Sozialismus und Staat.
Adler; Die Staatsauffasseng des Marxismus.
（5）小泉信三「私とマルクシズム」昭和二五年、一二三頁。
（6）小泉信三、前掲、一二五―一二七頁。
（7）小泉信三、前掲、一二七―一二八頁。

八

次に先生はレーニンの暴力革命絶対必要論について批評される。

レーニンは暴力革命の絶対必要をマルクス、エンゲルスの正しき解釈として唱えた。この解釈の当否如何。小泉先生によれば、レーニンの解釈には明らかに遺漏があるという。彼の引証は明らかに偏している。エンゲルスは執拗に暴力革命の讃美歌を歌ってきかせたとレーニンはいうが、同時に彼が別の機会に平和手段の讃美歌を歌っている事実を示すことも決して難事でない。[1] これらの事実を指摘して、レーニンの解釈の遺漏をつくことは、カウツキーその他の社会民主主義者にとって容易の業であったと思われる。マルクス、エンゲルスの著作の全時期に亘って広く様々の機会の発言を引用して綜合すれば、どうしてもマルクス、エンゲルスはある場合には暴力革命の必要を説き、ある場合には合法的平和運動を讃美したとより外には言いようがない。それではいかなる場合には暴力革命が必要とされ、いかなる場合には合法的平和運動で事足りるかと言えば、そのバロメーターは、当該国におけるデモクラシーの発達程度に左右される。デモクラシーの発達程度が高く、国民の政治意識の普及徹底している国々、たとえば、イギリス、アメリカ、フランス、オランダ等では暴力革命は避け得べく、プロレタリヤの国権掌握はプロレタリヤの数量的、精神的発達の結果、議会を通じて合法的手段により、平和の裡に行われ得るに反して、デモクラシーの発達程度の低い国々や専制的な官僚や軍閥の国家では、「安穏平和なる方法をもって共産主義社会を建設することがいかに甚しき幻想であるか」を説き、暴力をもって「これを粉砕すること」をもって「真の民衆革命の予備条件」であると見た。マルクス、エンゲルスは、プロレタリヤの国権掌握が暴力的に行われることも、平和的に行われることも両方共に可能であることを、はっきりと承認していたのである。従って暴力絶対必要論をマルクス、エンゲルスの真意とするレーニンの解釈が一方的で、独善的のものであることは明らかであった。このように先生は主張される。[2]

マルクスの国家論の今一つの重要な問題点はプロレタリヤ独裁とデモクラシーとの関係である。マルクス自身、このプロレタリヤ独裁なる語の意味を充分説明しておらぬため、ここにこの独裁は果してデモクラシーと相容れぬものであるかどうかという疑問が生れてくるのである。ここでまたレーニンの解釈がはいり込んでくるわけである。レーニンがマルクス、エンゲルスの真意なりとして説くところによれば、プロレタリヤ国家の政権はデモクラシーによらず、その対立物としての独裁の形式の下において行われねばならないというのである。すなわち階級敵たるブルジョワジーからの一切の市民権を停止し、剝奪して、プロレタリヤの一方的な市民権を基礎として、純粋の単独支配の下に行われなければならぬというにある。

これは果してマルクス、エンゲルスの真意に合致するものであろうか。先生はこの問題でもまたレーニンと対決される。いわく、通常の用語例に従えば、独裁はデモクラシーの中止又はその反対極を意味している。しかも何ら法律の拘束を受けざる一個人の単独支配を意味しているのである。しかしマルクスはすでに一階級の独裁というのであるから、独裁の語を上記の如き文字通りの意味に用いなかったことは略々明らかであるといってよかろう。マルクスはブルジョワジーの独裁の対極としてプロレタリヤの独裁を説いているのである。そして「ブルジョワ独裁」は略々ブルジョワジーの支配の意味に用いられていて、必ずしもデモクラシーの撤廃という意味では用いられておらぬ。プロレタリヤの独裁はプロレタリヤ階級が国家権力を掌握して、単独支配を行うことの意義に解すれば足るもので、必ずしも一切他階級属員の政治的権利の剝奪を必要としない。無産階級の単独支配はデモクラシーの停止によって行われることもあり得れば、又デモクラシーの埒内においても行われ得るものである。[3] このように言現わされて、これを裏付けるマルクス、エンゲルスの若干の文言にその積極的典拠を見出された後にディール、マウトナーを援用される。[4]

以上が先生のマルクシズムの研究と批判の要旨である。

マルクス死後すでに八十有三年、彼に関する著作、研究は汗牛充棟という言葉通りに多い。国外の状況はしばらく別として、数多いマルクス研究者の中で、最もよく知られた人といえば、何人も福田徳三、河上肇の名を挙げることに異論はあるまい。福田博士は資本論に、唯物史観に、国家論についてすぐれた研究をのこされたが、いずれも断片の域を出てはいないと思う。河上博士の資本論、唯物史観の解明と啓蒙に尽された功績は高く評価さるべきであろう。しかし解説啓蒙の努力がやがて傾倒、信仰に変り、共産党への入党という実践に進み、マルクス不謬という宗派的熱情に変って、もはや科学的批判精神を失ったマルクス信徒に終ってしまった。この間にあって、先生は、資本論に、唯物弁証法に唯物史観に、国家論に、冷徹、犀利の分析と批判を加えられた。もとより先生のマルクス批判のすべてが、充分適切かつ妥当であったというのではない。先生の指摘されたマルクシズムの問題点にしても、すでに幾多の学者によって論及されているので、決して先生の意見といえないものがある。しかし、先生の指摘された諸疑問の多くには今日に至るも、なお満足すべき解答は与えられていないという有様である。マルクス研究者は無論のこと、マルクス主義者達も謙虚に先生の批判に傾聴すべきであろう。

以上、先生の社会思想研究の跡を概観した。先生の社会思想研究はラッサールに初まり、ギルド社会主義を経てマルクシズムに及んだが、その研究の中心は何といってもマルクシズムであった。昭和八年（一九三三年）先生の塾長就任を境として先生の学者としての研究生活は一応閉じられたけれども、先生のマルクシズムへの関心は、なおソヴェート共産主義の政治的成長と関連して、終生変るところがなかったことは、後年の数々の先生の随筆を通してうかがい知ることができる。もしも事情が先生に研究生活を続けることを許していたならば、あの卓抜な頭脳は必ずや未曾有の学問的成果を後世にのこしたことであろう。思えば惜しみても余りあることである。

（1） 小泉信三「マルクシズムと国家」社会問題研究収載、七九―八〇頁。
（2） 小泉信三、社会問題研究、前掲、大正一四年、八二、八三、八六頁。
（3） 小泉信三「社会問題研究」一〇六―一〇八頁。
（4） Diehl; Die Diktatur des Proletariats und das Rätesystem. Mautner; Der Bolschewismus.